

Photo Space

記録・創造・交流のための

ロゴデザイン：富樫茂美

現代写真研究所

〒160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 サノバビル 5.6F

03-3359-7611 (TEL) 03-3355-1462 (fax)

<http://www.genken.ac>

jimukyoku@genken.ac

責任編集 金瀬 胖

禁無断掲載 許可なく作品の使用はしないでください。



Winter 2022 vol.4 2022.1.12 発行



跨線橋—水道本管と野球少年 金瀬 胖 2021年12月東船橋

年のはじめに

コロナのために会って写真を見る機会が減りましたが、この photospace でこれまで見たことのない写真を見ることができるので毎号楽しみです。年頭にあたり講師の写真を多く掲載します。

正月のテレビは相変わらずの喧噪。そのあいまのドキュメント、ニュースの断片は、世界を消滅させかねないような大きな出来事を相次いで告げていた。そして乗り越えたはずの全体主義、戦争主義がむしろ「先進国」において多数派になっている。写真はその事態と関係ないと言えるか、と自問する。私は無風の穴ぼこにいるような気がする。それは何故か。やはり写真は関わりがある。ベトナム戦争は最も非道な戦争と認識され、世界で大きな反戦運動が起き、アメリカは「ベトナム人民にまけたのではない、報道写真に負けたのだ」と総括した。メディアへの介入、写真の力の抑制、論調管理《悲慘を告げる写真は古い、悲慘より美と喜びを》が個々人の力が及ばない大きな規模で展開された。いまの「自由世界」がそうであるといえる。

この時期の写真が戦争の悲慘さを伝えただけではなく、全生命の存在と自由を問う「写真の眼」を生んで

いたことも確認しておかなければならない。故にこの話の行き先は世界の危機、悲慘を撮ろうということに尽きない。無風の「穴ぼこ」から出ようということだ。風をうけ裸の眼で世界を見なおそうということだ。ここで世界とは地理上の世界のことではなく、眼の前にあるこの場、この時のことだ。コロナによって、「この場、この時」にかかる霞が払われてその地層、人が（資本が、政治が）その危うさ知りながら積み上げてきた地層が見えるようになってきた、と私は思う。「ように」というのは途上にあるということ。コロナは人の文明、活動が地球上に生命の存在を不可能にするレベルに達していることを告げている。未来の問題なのではなくて、いま人間がすでにしてしまったことを知り、それを為した思考と生活の枠組みを根底から変更することをコロナは迫っている。

大きな課題の話になってしまった。大事なテーマに勇気をだして取り組んで欲しいと思って敢えて書いた。大きなテーマは、まず小さなテーマを一つずつ取り組むことだ。

金瀬 胖 教務主任

contents

- 2- 藤田篤男
- 3- 今井賢吾
- 4- 中澤ふみ子
- 5- 尾辻弥寿雄
- 6- 英伸三
- 7- 長澤洋平 田沼洋一
- 8- とみたやすよ
- 9- 山本やす子・金井紀光
- 10- 渡邊章弘
- 11- 亀井正樹・竹山洋一
- 12- 足立君江
- 13- 鈴木知之
- 14- 入江進
- 15- 宮本遼
- 16- 金瀬 胖



「福島—あの日から十年」
藤田篤男 オンラインワークショップ



「宙（そら）へ」 今井賢吾 金井ゼミ

大都会に中にあっても 安心できることなく不安はいつも付きまとう。周りにあふれる街の表情の中にも 暗示する様々なものがある。マイナスなのかプラスなのか判然としない現象に戸惑う自分がある。それでも前に進む。



「冬日影」 2021・12 お茶の水／上野
中澤ふみ子 日曜撮影専科



「東京タワーと勝鬨橋」 尾辻弥寿雄
総合科・ゼミ講師

当たり前のように見てきた風景が見る角度やタイミングによってアレッと振り返って見直し確認したくなる瞬間がある。ビルの際間から瞬間に見えたタワーは確認するまもなく消えたがカメラと目の残像に残っていた。アーチの美しさがクローズアップされる勝鬨橋のアーチを支えるアームがこれほど美しいとは思ってもなかった。



「三河島事故」 1962/5

英伸三

特集「ネガからの発見」で、59年前の1962年に撮影した三河島事故のネガを久しぶりに確認した。死傷者544人を出した重大な鉄道事故であるのに、現場で撮影したのは35ミリフィルム3本分しかない。二本はトライXでもう一本はフジのネオパンSS。当時、トライXはとても高価で安易なシャッターは切れなかったから、これだと思ふ場面を凝視し、一発必中の撮影だった。ほとんどが一場面一コマのネガをみながら、一枚のフィルムに託した写真記録の重みを再考した。(写真リアリズム292号より転載)



「飛翔」 2021/11 長澤洋平 尾辻ゼミ

早朝の千葉、稲毛海浜公園を訪問。カラス数羽を発見、飛び立った1羽を流し撮りした。
ファインダーが捉えたカラスと何か通じ合えた気がして、生きている喜びを感じた。



「カラフルなアパート—板橋区」 田沼洋一 講師

ここは板橋区で荒川以南の平野、高島平のはずれ徳丸でここから南は丘を登り都心に向かう。
最近高島平団地の周りの駐車場が次々とマンションになっていく。駐車場の無彩色な車とカラフルなアパートのコントラストが眩しい。2021.10.02 13:25 撮影



「四谷・圓通寺坂夕暮れ」

とみたやすよ 日曜撮影専科

東京は思いの外、四谷のように窪んだ地域があり高低差がある。窪地には江戸の昔から庶民がひしめて暮らしていたらしい。四谷にはそうした面影が今も残っている。



「安全に」 山本やす子 講師

アイドル？だったのに姿が消えていた。代わりに子どもの姿絵看板になった。少子化で並んで通学する姿もパラバラ、こんな処にも時代の変化が・・・

山形県中山町 2016.1.15 撮影



「願」 金井紀光

ゼミ・オンラインワークショップ講師

新型コロナが流行する前の年の正月、浅草寺で真剣に何かを祈る外国人観光客の姿が印象的でした。コロナ前、後では、浅草の様子もずいぶん変化しました。さて、今年はどうな年になるのやら。

「平成の残像」

渡邊章弘 日曜撮影専科

平成が終わる頃、写真を志す者にとっては聖地の一つだった築地市場が豊洲に移転してしまう。そして令和になりコロナ禍が起き、とうとう3年目に突入。緊急事態宣言、自粛生活、働き方改革などなど・・・未だに我慢を強いられる。

今日の夕刊に豊洲市場のマグロの初セリの記事があった。毎年「すしざんまい」とマグロ仲卸「やま幸」との競り合い。結局、今年の「一番マグロ」は「やま幸」が競り落とした。懐かしくなり、コロナ前、平成の頃の写真を引っ張り出してみた。

2019/1/2(浅草寺) 身動きが取れないほどの人だが、今年も結構これに近かったようだ。



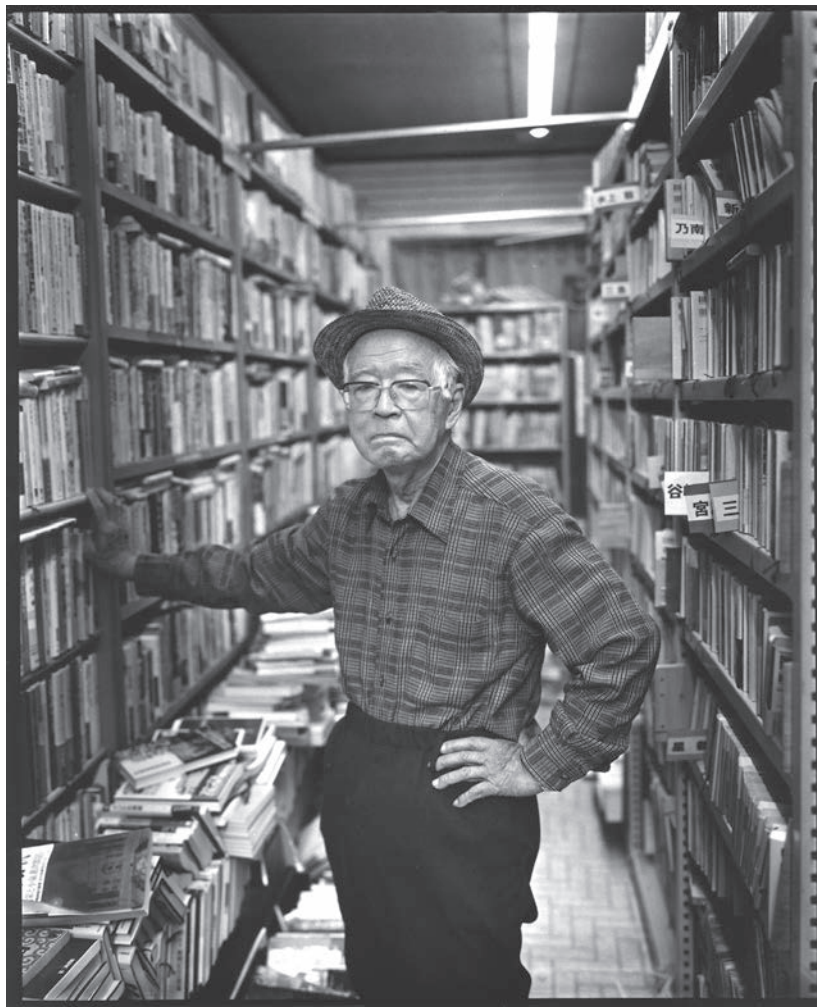
2018/1/15(JR 品川駅)

毎朝、同じ時間、同じ経路で出勤するサラリーマン。右側通行をテープで規制されている。リモートワーク、働き方改革で変化はあったのだろうか。



2018/9/22(築地市場)

マグロ仲卸「やま幸」の場内店舗裏にマグロ解体のための作業台があった。この時のマグロは大間産で、200キロは優に超えていた。男達の真剣勝負を間近に見ることができた。こんな絵は、もう自由には見られない。貴重な記録となってしまった。



「古書店主」 亀井正樹
モノクロフィルムワークショップ講師

地域でも愛された古書店だったが89歳の主は逝ってしまった。そして店も閉店した。
主の貫禄と店内の空気感を引き出したく8×10カメラを使ったが…。

「洲崎灯台 — 100年東京湾の出入を照らす」
竹山洋司 土曜ゼミ

千葉県は半島で海岸線が長い。地形は北から下総台地、上総丘陵、安房山地（標高愛宕山 406 m）と南に高く須崎で海に没する。地質構造上から磯浜も多く、江戸時代から海防と安全航海が重視され、仕様風の灯台が建造られてきた、千葉の灯台巡りはそこから始まった。

撮影日 2021.12.13



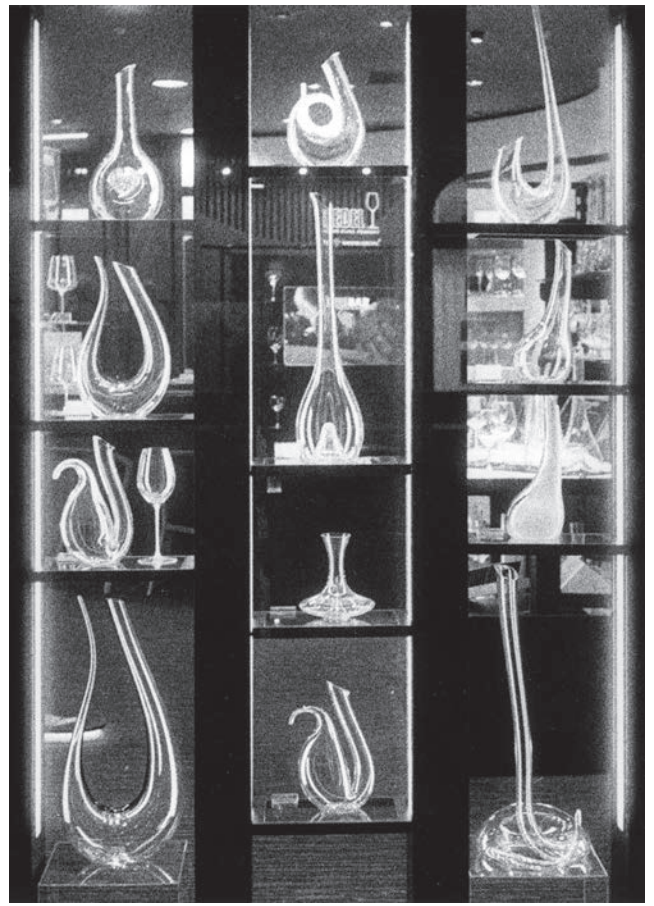


「安曇野の野菜畑」 足立君江 講師

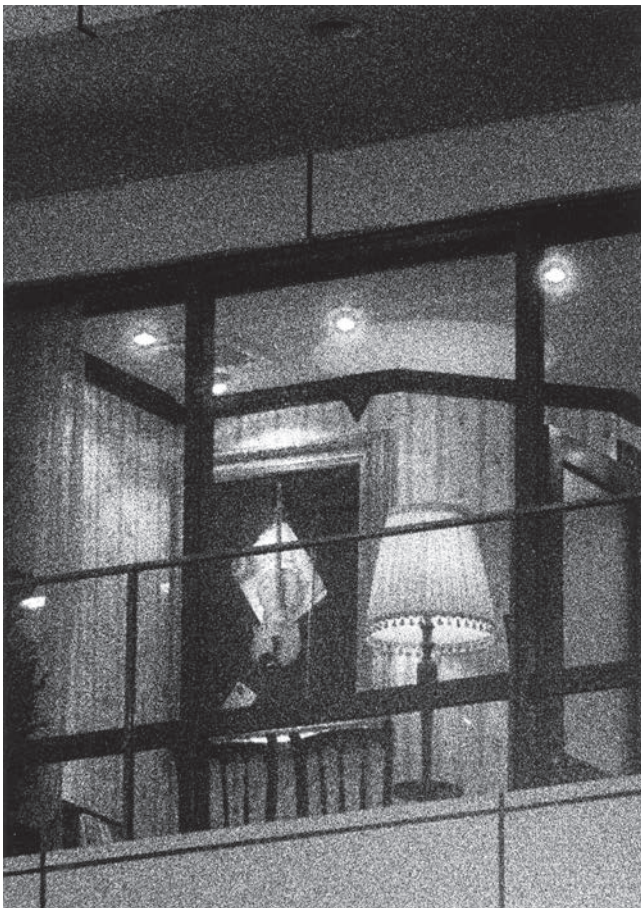
日本でも有数の長寿の地域である安曇野。高齢化が進み、田んぼを野菜畑にする農家が増えてきた。この大根は伸びる途中で固い土や石にぶつかり変形したもの。味に変わりはないので埋めて保存するという。



Reindeer (トナカイ)



Decanter (デキャンタ)



Room (部屋)



Pterophyta (シダ)

鈴木知之 Monochrome Film Workshop 講師

フィルム現像の特殊処理による粗粒子プリントは、一般に荒々しくラフな表現と思われる。しかし実際にやってみると、まるで点描画のような美しいディテールとグラデーションを持っている。特にデジタルでは苦手とされるハイライトの表現は、非常に繊細で神秘的だ。銀塩の可能性と奥深さを感じている。



「一木のささやき」 入江進 ゼミ・デジタル研究科 講師

秋の入口に檜の大木と出会う。霧が背景を覆い隠して、その存在を誇示してくれた。時に、霧は大樹をも覆い尽くし、木のささやきすらもかき消していた。



「風と私」 宮本遼 総合科・オンラインワークショップ講師

2021年の夏、伊豆の海を訪れた。砂浜に映る影を見て、精神的な部分と向き合い、よく海で自分の写真を撮っていたことを思い出した。風で飛ばされそうになるマスクをポケットにしまい、タイマーをセットした。シャッターを待つ10秒間はあの時より穏やかだった。



金瀬胖の音楽写真シリーズ「楽興の時」より 千葉交響楽団・第110回定期演奏会／Vn・神谷未穂 指揮・山下一史

コロナ禍によりようやく開かれた演奏会。メンデルスゾーンのVnコンチェルトの終楽章、木管と掛け合いながらテンポよく追い込んでいくところ。指揮者とソリストは背中で対話している感じ。手の陰でよく見えませんがコンサートマスターも嬉しそうな顔。緊張も、笑みも、潤んでいる目もあり、それは客席にも広がり感動的な創造空間が生まれます。後に「歴史的名演奏」と言われる演奏がありますが、それは狙って撮れるものではない。狙えばいやらしい。狙うものではないように思います。にもかかわらず私が写真を撮るのは音楽家への敬愛、音楽の力というほかない。わたしは音楽の写真に『楽興の時』と名付けています。写真は生の音が来るところで撮るようにしています。現場の響きを聴かなければ絵柄だけの写真になるように思います。客席で撮る時はとても緊張しますが、演奏が終わり帰る人に通路でご苦勞様とよく声をかけられます。写真を理解してくれているのが嬉しい。